■代官山の緑を守り継ぎ、新たな賑わいをつくる外構計画

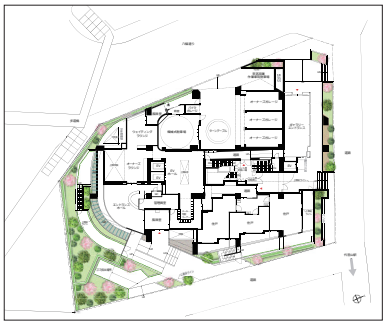
メインエントランス

南側隣地と樹木の取り合わせ

街のベンチ（街への貢献）

北西コーナーの緑越しにギャラリーを望む（街への貢献）

建築家槇文彦と朝倉不動産は 30 年をかけヒルサイドテラスと代官山の街を作り上げてきた。彼らは森を守り、丘という特徴を建築の断面に活かしギャラリーなど街に開かれた空間をつくった。その精神を引き継ぎ、街路から少し下がったギャラリーを計画、敷地の一角にベンチを設け公園のような場を創出、街に開かれた緑を敷地に沿って立体的設け、街に住まう人、訪れる人が桜を中心に四季を感じられる計画としました。



南側隣地と樹木の取り合わせ

ギャラリー（街への貢献）

ギャラリー活用風景（街への貢献）

■街の風景をつくる立面

中銀白井マンション (1992)
アルディア・ヌーボ

D' グランセ南青山ハイヴァリ (2006)
Re・KATSURA

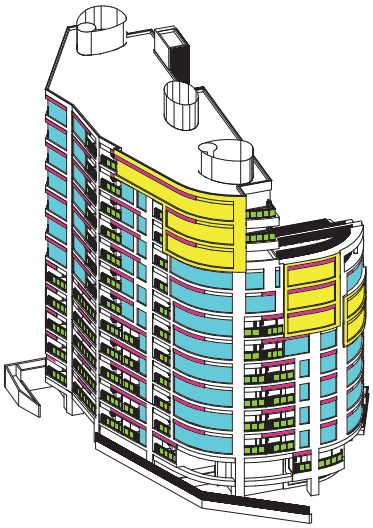
THE CONOE 代官山 (2016)
ロミオ＆ジュリエット

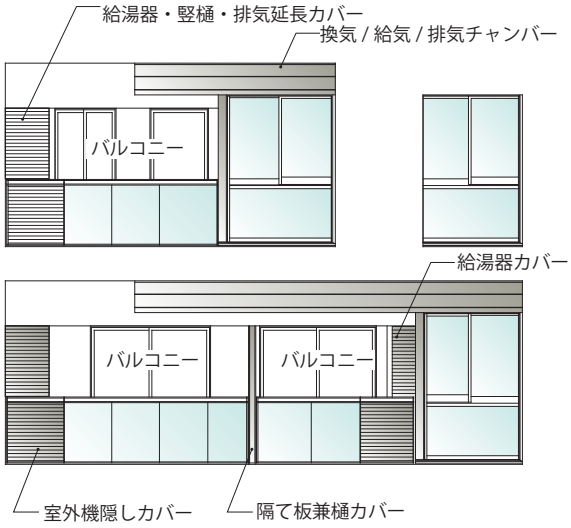
立面に表情を与える - 代官山の格調を高めるような外観 -

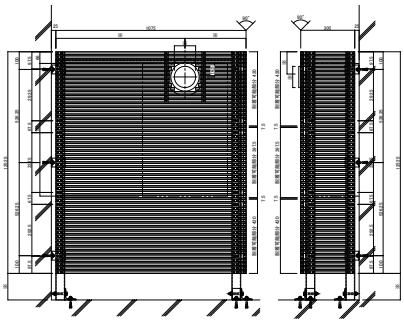
- コスト内でできるだけ部屋のバリエーションを多くする
- 部屋の大きさ等のバリエーションが elevation に現れること
- 立面の構成がシステムから出来るだけ遠くにいること
- 大きな部屋、中程度の部屋、小さな部屋の組合せであること
- タテはタテならず、ヨコはヨコならずの立面構成を目指す
- 構造の束縛から逃れていること
- 開口部（ガラス面）が大きく、バリエーションがあること
- ホリの深い表情があること

立面を構成するディテール

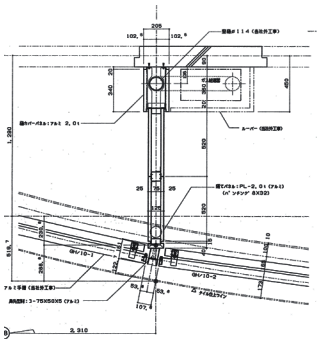
ファサードに樋や室外機、給湯器などが露出しないよう、カバーを設えた。結果、立面上に様々な表情や陰影を生み出す要素となっている。また、外国人居住者もターゲットとしガラス面の多い開口部を設け、代官山の街に重さや圧迫感を与えないように、外壁は夕陽を浴びて白色から桜色に変化するタイルを何日も試行錯誤して焼き、均質でどこにでもあるような建物とは違う、代官山の格調を高めるような外観を目指した。

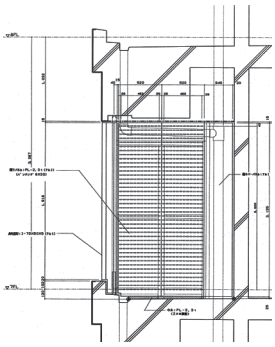




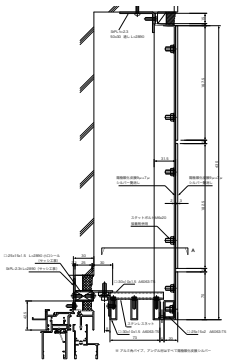


給湯器カバー (標準タイプ)





隔て板兼樋隠しカバー (標準タイプ)



換気チャンバー BOX

街の風景を作る立面の構成

1992 年に完成した中銀マンション (西白井) のアルディア・ヌーボー以来、集合住宅の立面の構成について考え続けてきた。オランダの建築家ミハエル・デ・クレルは「労働者は均一の仕事を余儀なくされている。だから生活は変わった方がよい」と言って、箱型の集合住宅とひと味違ったものを作った。街の景観を考え、その街、その場所にあった（例えばギャラリー等）を付加することは重要だとし、一律の片廊下、バルコニーのタイプやグリットやタテに立面をかけ割にしたものは、街から個性を奪い、活気を失わせると考えています。